

蒼の彼方のフォーリズム EXTRA0

蒼崎れい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはまだ空を飛ぶことを知らなかった少年と、飛ぶことの意味を見失いかけていた少女の、もしかしたらあつたかもしれない物語。あの時に悩みを打ち明ける勇気があれば、飛ぶことへの答えを持ち合わせていたのなら、もっと違った未来になっていたのかもしれない。

作中では詳しく語られなかった、ジュニア時代の日向昌也と各務葵の話が個人的にすごく読みたくていても立つてもいられなくなりました。反省はしていない。

目次

プロローグ

おれも空を飛びたい

1

第1話：おねえちゃん、おれに飛び方教えてよ

Chapter 1

3

Chapter 2

10

Chapter 3

15

Chapter 4

25

第2話：飛翔姫のサーカス

Chapter 1

36

Chapter 2

43

Chapter 3

52

プロローグ

おれも空を飛びたい

今思い返してみれば、あれは運命だったのかもしれない。『近くで面白いものがやっているから、一緒に見に行かないか？』父親のそんな一言に誘われ、俺はあの日、あの場所で、あの人に、あのスポーツに出会ったのだ。

会場は俺の住んでいた久奈島ではなく隣の福留島。会場まではフェリーを使わなければならず、当時小学生だった俺からすれば気軽に行けるような場所ではない。宿題があるから、見たいアニメがあるから、暑いからクーラーの効いた部屋でゴロゴロしたいから。断る理由はいくらでもあつたはず。

それでも父親に着いて行ったのは、たぶん……。自分だけの何かを見つけたかったのだと思う。それが本当に面白いものかどうかなのか、自分の目で確かめたかったのだろう。

友達が誰もやっていない、夢中になれる何かを。

懸命に取り組んで、誰よりも強くなれる何かを。

誰も行ったことのない場所へ行くために……………。

衝撃的だった。鮮やかな光のラインを空に引きながら、自由に空を駆け回る選手達の姿がそこにはあつた。鮮やかに相手を躲し、あるいは振り切り、背後を取り合つてバチバチと光跡を散らす。得点が入る度、歓声が上がる。初めて見る技に、拍手が沸き起こる。

その競技——フライングサーカス——はまさしく俺の求めていた、必死に食らいついてでも自分だけのものにしたかった何かだった。

今でも、あの時の感覚は覚えている。全身の血が沸騰したように熱くなつて、気付けば手が赤くなるほどこぶしを強く握りしめていた。時が経つのも忘れ、父親の声も耳に入らないほど、夢中になつて空を見上げていた。

そんな中で、一際強い印象を残す選手がいた。紅いフライングスーツとグラシユ、そして一直線に伸びる黄色いコントロール。他のどの選手よりも自由に縦横無尽に空を駆け巡り得点を積み重ねる様は、まるでサーカスのよう。行く手を遮られればその脇をすりりと躲し、背中を取られたと思えばいつの間にか立場が入れ替わっている。

見ているだけでワクワクが止まらない。もっと近くで、もっと長く、あの人が飛んでいる姿を見たい。そしてできることなら、俺もあんな風に飛びたい。

あんな風に、まだ誰も行ったことのない——あの青い空のずっと向こうまで空を飛んで行きたい。

いや違う、俺もあの人みたいに飛べるようになって、絶対にあの場所まで行くんだ。

圧倒的な強さで地区大会を優勝した選手に、憧れを抱かずにはいられなかった。

それが、フライングサーカスというスポーツと、俺と葵さんの、最初の出会いだった。

第1話：おねえちゃん、おれに飛び方教えてよ

Chapter 1

いよいよ、待ちに待った日がやってきた。小学校から帰ってきた俺は靴を脱ぎ捨て、台所までダッシュする。なぜかって、そりや母さんと一緒に福留島のスカイスポーツ店に行くためだ。

「母さんー！」

台所へ駆け込んだけど、そこに母さんの姿はなかった。

「昌也、靴はちゃんと揃えなさいって、いつも言ってるでしょ？ ほら、部屋にランドセル置いてきなさい。母さん、もう準備は出来てるから」

と、リビングへ続くドアから母さんが顔を出す。言うことを聞かなくて、一緒に行ってくれないってなったら大変だ。ダッシュで玄関まで戻ると、ひっくり返っていた靴を綺麗に揃え部屋まで駆け上がる。いつもなら早く宿題をやりなさいと言われるところだけど、今日だけは違った。

やっぱり夢じゃない、ようやく俺もあそこに行けるようになるんだ。それが嬉しくてたまらない。ランドセルを机の上に置くと、ゼファイリオンのファイルを持って一階へ急いだ。

いつもよりおしやれな服装なのがちよつと面白い。ファイルを落とさないようにカバンに入れてきなさいと言われるけど、絶対に落としたりするもんか。

早く早くと急かす俺に根負けして、やれやれと呆れる母さんと一緒に家を出た。バスに揺られ、港から福留島行きの高速フェリーに乗り込む。こんなに時間が長いと感じるのは、今までで初めてかもしれない。

待ちきれずに、家を出てからもう十回は見たそれをゼファイリオンのファイルから一枚のプリントを取り出す。『受取証』『MIZUKI』『飛燕』三つの文字列が俺の目と心の中で飛び跳ねている。

父さんとライニングサーカスの地区大会を見た後、俺はどうしても

グラシユが欲しいと言ってせがんだ。すぐには無理だったけど、来年には誕生日がくるので年齢制限もどうにかなる。

大会が終わったその足で連れて行ってもらったスカイスポーツ店は、まるで夢のような世界だった。空を飛ぶためのグラシユが、こんなにいっぱいあるなんて。

でも、俺の欲しいグラシユはもう決まっている。目に焼き付いて離れない、あの選手と同じグラシユが欲しい。父さんから店員さんに頼んでもらって、グラシユの説明を色々としてくれた。

地区大会で優勝した選手と同じグラシユが欲しい。そう言って案内された『MIZUKI』という日本メーカーの商品棚。その一番上に俺を魅了して止まなかった、あの選手の履いていたのと同じグラシユが、さんぜん燦然と輝いていた。

でも、さすが優勝選手の履いているグラシユ。展示用でここにあるもの以外は、『MIZUKI』のグラシユはほとんど在庫を切らしているとのこと。全国的にも品薄で、次に入ってくるのはいつになるかわからないのだという。

がつくりと肩を落とる俺に、店員さんはある提案をしてくれた。それが『MIZUKI』のテストユーザーに登録するというものだった。もし正式にテストユーザーに登録されれば、『MIZUKI』からグラシユが送られてくる。もちろん、落選する可能性だってある、むしろそっちの方が大きかっただろう。もし受かったとしても、飛行データの提出義務があったりで大変なのは間違いない。

でも俺にとって、何にも代えがたい朗報だった。さつそく父さんに頼んで、テストユーザーの登録書類を作ってもらった。ちなみにモデルはあの選手と同じものが良かったけど、あれはトップ選手じゃないと扱えないから絶対にこっちにしてくださいという店員さんの必死の説得で、ハイエンドモデルの『紅燕』ではなく、一般モデルの『飛燕』になった。

それでも、同じシリーズのグラシユだと思おうと胸の奥が熱くなる。だから、テストユーザーに受かったと通知を受けたときは、飛び上がるほど嬉しかった。これで誕生日がくれば、あのグラシユを履くこと

ができる、空を飛ぶための翼が、自分のものになるんだ。

この1年の間のことが、頭の中で何度も再生される。期待と待ち遠しさがぐちゃぐちゃになって、家では毎日グラシユとFCの話ばかりしていた。

『乗船中の皆様にご連絡します。当船は間もなく、福留島港に到着します。お荷物のお忘れ物のないよう、ご注意ください』

もうすぐ到着を知らせるアナウンスが流れる。俺はグラシユの受取証をファイルに仕舞い席を立った。

「もう、昌也ったら。港につくまではもうちよつとかかるんだから、落ち着きなさい」

「だって、ずっと待ってたんだぜ！ もう待ちきれないよ。ああ、早く着かないかなあ」

結局港につくまで、俺は立ったまま福留島を見続けていた。

スカイスポーツのお店に到着した俺は、母さんを置いて一目散にレジまで突っ走った。

「日向昌也です！ グラシユを受け取りに来ました！」

ファイルから取り出した受取証を、バンツ！ と台に叩きつけた。店員さんは、最初はびっくりしていたようだったが、別の店員さんが近寄って耳打ちをすると、優しげにふつと笑って店の奥に消えていった。

「テストユーザーの認定、おめでとう。今だから言っちゃうけど、受かるだなんて全然思っていなかったからびっくりしたよ。やったな、ぼく？」

「うん！ これもお兄ちゃんおかげだよ！」

耳打ちしたのは、テストユーザーの登録を提案してくれた店員さんだった。俺のこと、覚えてくれてたみたい。なんかちよつと嬉しい。

「もう、昌也ったら。すいません、うちの息子が」

「いえいえ、元気があっていいですね。お子さんが欲しがってるモデル、まだ在庫確保している最中なんで、普通ならまだ手に入らないんですよ。テストユーザーに認定されて、本当に運が良かったです」

「あら、そうなんですか。よかったわね、昌也」

「早く早く！ グラシユ早く履きたいよ！」

「すいません、いえいえかまいませんよと、母さんと店員さんが何度か言い合っているとお店の裏に行っていた店員さんが両手に箱を抱えて出てきた。」

「えっと、これですよね？ 『MIZUKI』からテストユーザー向けに届いてた 『飛燕』です」

「そうそう、ありがと。ここはいいから、別のお客さんの対応をお願いね」

「わかりました、それでは」

箱を渡すと、グラシユをとってきてくれた店員さんは軽く手を振って別の場所へと向かう。そして顔見知りの店員さんはカウンターから出てくると、中腰になって箱を俺に渡してくれた。

「はい、こちら『MIZUKI』の『飛燕』になります」

「やった！ ありがとう！」

テストユーザーの認定証が届いてから半年、あの日の予選大会から9ヶ月、ついにこのときがやってきたのだ。ずっしりとした箱の重さに、全身が総毛立った。

「じゃあ、早速試し履きだな。箱から出して履いてみて。色々と調整しないといけないから」

「はい、お願いします！」

俺は早速箱のテープを剥がし、グラシユを取り出す。白を基調とし、わずかに緑がかかったライトブルーの鋭角的なラインがかっこいいデザインだ。

店員さんはグラシユのかかと部分を引っ張り上げると、そこに現れた端子と手元の端末をUSBケーブルに繋ぐ。一体何をしているんだろう？

「君、名前はなんていうんだっけ？」

「俺は昌也、日向昌也っていうんだ」

「昌也くんか。これはね、バランスサーっていうのを調整しているんだ」「バランスサー？」

店員さんの端末のモニターには色々な数値が現れると、色々な数値を目一杯まで上げていく。

「そう、バランスー。昌也くん、年齢制限が解除されたばかりってことは、まだ飛んだことはないんだよね？」

「うん、だから今日まで頑張って我慢してたんだもん」

「だから怪我をしないよう、グラシユの感度を落としているんだ。その方が、最初は飛びやすいからね。あと、お店の中で高く飛ばれたら頭も打っちゃうし……。よし、これでOKだ。履いてみて」

「うん」

USBケーブルを抜き、引っぱり上げたかかとの底をもとに戻して店員さんはグラシユを俺に渡してくれた。俺はすぐに履いてきた靴を脱ぐと、グラシユに足を通す。ぴっちりとした長靴を履いているみたいで、足にぴったりフィットする。なんかこのガチャガチャした感じ、ゼフィリオンみたいでかっこいいかも……。

「ねえねえ、どう？ 似合う？」

俺はグラシユを履くと、母さんと店員さんの前で仁王立ちする。普通の靴と比べると、重くてちよつと違和感があるな。でも、だからこそやつとグラシユを手に入れたんだという実感が湧いてくる。

「ああ、かっこいいぞ」

「なかなか素敵じゃないの。よかったわね、昌也」

店員さんにも母さんにも褒められて、嬉しさが止まらない。思わずその場でくるくる回って、シャキーンとポーズまで決めてしまった。

「で、これってどうやって飛べるの？」

「電源を入れて起動ワードを言えばいいんだけど、その前に基本姿勢を教えるおかなきゃね」

「きほんしせい？」

店員さんは靴の踵に触れて立ち上がると、両手と両足を大きく広げて大の字になった。

「これが基本姿勢。この状態が一番安定するんだ。まずは、浮くのに慣れるところからスタートだね」

「ううん」

店員さんの姿勢に習って、俺も両手と両足を広げてみる。

「そうそう、そんな感じ。じゃあ、ちよつと飛んでみようか。踵のところに、スイッチがあるから、まずはそれを押してみて」

「えつとおお、あ、これか」

踵の部分をペタペタ触つてみると、丸いスイッチみたいなものがある。それを押すと、ピコーンッと軽い音が鳴って靴の両側からラインと同じ色——わずかに緑がかったライトブルーをした光の羽がちよこんと横から現れた。

それから、ブブブブツと足元から振動が伝わってくる。背筋がぞくぞくするこの感じ、生まれて初めてだ。むず痒いけど、知らない世界に触れているんだという感触に、俺は感激していた。

「じゃあ、さっきのポーズになって、踵を少し浮かせて」

「はい！」

「そして、起動ワードを言うんだ。『FLY』」

「ふ、『FLY！』」

店員さんに少し遅れて、俺の体もふわりと宙に浮かび上がる。体験したことのない浮遊感に、思わずのけぞりそうになった。

「落ち着いて、シューズの電源が入っている内は落ちることはないから。まずは背筋を真っすぐ伸ばして、基本姿勢」

「は、はいっ！」

ほとんど反射的に直前に習った姿勢に戻す。始めは振り子みたいに揺れていた下半身も、3秒もすれば収まった。

「そうそう、いい感じだ」

「こ……これ、すごい、難しいっ!? ですね！」

ちよつとでも足を閉じようとしたり、腕を下ろそうとするとバランスを崩してひっくり返ってしまいそうになる。ただ浮いているだけなのに、グラシユで飛ぶのってこんなに難しいんだ。

「感度を下げているとは言っても、やっぱり競技用のグラシユだからね。普通のグラシユと比べたら、やっぱり飛ぶのは難しいよ。それでどう? 初めて飛んでみた感想は」

「す、すごい、ワクワクします！」

「そうかそれはよかった。解除キーも同じだからね。『FLY』」

店員さんは解除キーを言って、ゆっくりと床に着地する。俺もそれに習って、解除キーを口にした。ふわふわとゆっくり降下を始め、両足が完全につくとそのまま尻もちをついてしまった。でもこんな状態で、本当にあの選手みたいに飛ぶことができるようになるのかな？ そんな不安を読み取ってか、店員さんはポンポンと俺の頭を撫でてくれた。

「初めてならそんなもんさ。むしろ、上出来なくらいだよ。中には基本姿勢ができなくて、くるくる回っちゃうような人だっているんだ。だから、そんなに落ち込むことはない」

それじゃ、靴を脱いでくれるかな、と店員さんに促される。バランスーの設定を終えたグラシユを箱にしまい、持ちやすいように梱包して袋に入れてくれた。

「グラシユの講習は、久奈島でも受けられる。そこでちゃんと飛べるようになれば、飛行可能区域では自由に飛べるようになるよ」

店員さんは最後に案内の書かれたプリントを、ゼフィリオンのファイルに入れてくれた。正真正銘、これでこの『飛燕』は俺のものになったんだなあ……………。

「グラシユのことや、FCのことで聞きたいことがあったら、また来るといい。いつでも相談にのるよ。もつとも、久奈島に住んでいるならその必要もないかもしれないけどね」

久奈島にはこんな大きなスカイスポーツのお店はないから、そんなことはないと思うんだけどなあ。ばいばーい！ と大声で返事する俺に母さんは苦笑しながら、一緒に福留島のフェリー乗り場へと向かう。

定員さんは俺と母さんの姿が見えなくなるまで、ずっと手を振っていてくれた。

店員さんの言葉の意味を俺が知ることになるのは、もう少し先の話だ。

Chapter 2

福留島のスカイスポーツ店でグラシユを受け取ってから2週間、俺は小学校の授業が終わると友達の誘いもそっちのけで急いで家へ帰っていた。ただいまと言いながら部屋へ駆け上がると、ランドセルとグラシユの入ったバッグを持ち替えて行ってきますと家から飛び出す。

向かうのは久奈島役場。そこで毎日1〜2時間、グラシユの講習を受けているのだ。役場の人の都合もあるので、飛べる日もあれば座学しかない日もあったりする。でも、安全に空を飛ぶためにはグラシユのことを理解したり、空を飛ぶためのルールを学ぶことも大事なこと。学校の授業以上に、一生懸命になって講師をしてくれる人の話を聞いていた。

ちなみに、昨日はようやく安定して浮けるようになったところだ。まだ50センチくらいだけど。でも、ようやく体が浮く感覚にも慣れていき、今は大の字のポーズにならなくても安定して浮くことができ。なんなら、水平にちよつと移動するくらいなら全然余裕だ。

今日はどうにか頼み倒して、もつと高いところまで飛べるように設定してもらうんだ。早く、あの日見た空まで飛んでいかなきゃいけないんだから。そうして意気込んで家に帰ると、知らない靴が玄関にあった。お客さんかなでも来てるのかな？

「ただいま〜？」

靴をそろえて上がると、ゆっくり廊下を歩いてリビングで顔を出す。

予想通り、着崩したスーツ姿のおじさんがリビングでくつろいでいた。

「あ、昌也くん。久しぶりだね」

知らない人ではなかった。それどころか、俺にも見覚えがある。父さんの同級生で、家にもよく遊びに来ておじさんだ。今年もお年玉もらったんだから、忘れるはずがない。

「お久しぶりです。おじさん、こんな時間からなんで家にいるの？」

「あら昌也、おかえりなさい。おじさん、ちよつとお話があるそうだから、ランドセルを置いてきなさい」

台所へ続くドアから、母さんがでてくる。お盆には四島名物の和菓子とほうじ茶が3人分載せられていた。俺はおじさんにお辞儀をすると、ランドセルを自分の部屋に置いてリビングへ戻ってきた。

よくわからないけど、促されてソファアに座った俺は用意された和菓子に手を伸ばす。

「父さんがおじさんに色々頼んでくれてね。昌也にちよつとしたプレゼント？　があるそうなのよ」

「プレゼント？」

「そう。ヒントは、おじさんのお仕事は久奈浜学院の先生」

「久奈浜学院の？」

高校の先生がヒント？　高校に行くのなんてまだしばらく先なのに？

父さんと母さんの意図がまだよくわからない。

「そんな意地悪しないで、教えてあげましょうよ」

おじさんはコホンとわざとらしく咳払いすると、改めて俺の方に向き直った。

「私はね、昌也くん。今、久奈浜学院でFC部の顧問をしているんだ」
まるで金槌で頭を打たれたかのような衝撃だった。久奈浜学院FC部、そこには俺が憧れて止まないあの人がいるのだから。

各務葵選手、父さんに頼んで取り寄せてもらっているフライングサーカスの雑誌に、何度となく出てきた選手だ。仇州だけでなく、日本全国で名を轟かせる高校生最強の選手——スカイウォーカー。その人が所属している部の顧問の先生が、なんで家に来ているのだろう。全然話が見えてこない。

え？　もしかしてそういうことなの？　でも、それは流石にないだろう。だってまだ、ちよつと浮くことができるようになったくらいなんだし。

「昌也くん、フライングサーカスにすごく興味があるんだってね。お父さんから聞いたよ」

「は、はい！ この前、やっとグラシユを送ってもらって、今日もこれから練習に行こうとしていたところだ」

「そうかそうか、それなら丁度いい」

顧問の先生は和菓子を一口で食べてほうじ茶で流し込むと、立ち上がって含みのある笑いを浮かべた。

「すぐにグラシユを準備してくるといい。連れて行ってあげたい場所があるんだ」

「わ、わかりました」

これはもしかして、もしかしたりするのではないか？ 俺は期待に胸を膨らまさずにはいられなかった。

顧問の先生の車の後部座席に乗って揺られることしばらく。山の影から大きな校舎が姿を現す。県立久奈浜学院高校。先生が務めている学校、そして各務葵選手が在籍している学校だ。

「ふふふ。どこに連れて行かれるか、わかってきたかな？」

「久奈浜の高校、ですよね？」

「ああ、そのFC部をちよつと案内してあげようと思つてね」

自分でも顔がにやけてしまっているのがわかる。それと同時に心臓が痛いくらいに鼓動を始め、背中や手のひらからじつとりと汗が染み出してきた。

「もつとも、私自身はフライングサーカスの経験はなくてね。形だけ顧問をやらせてもらっている。だから、私にできるのはFC部に案内してあげるところまでだけなんだけど」

山の麓^{ふもと}までくると車は長い坂道を登り始める。会える、もうすぐ会える。憧れの各務葵選手に会える！

予感ほほ確信へと変わっていた。無意識の内にシューズバッグを抱く腕に力が入る。やばい、口の中が急に乾いてきた。嬉しさと同じくらい、相手にされなかった時の不安も大きくなる。坂道を登っている途中も先生が色々話しかけてくれたけど、全然耳に入ってこなかった。

校門を通り、校舎の裏側へと車を停めるといよいよ運動場の方へ移

動する。その途中、海の上の方に見覚えのあるものが浮かんでいた。4つのブイから伸びる光のライン、1辺の長さが300メートルある正方形のフィールド。フライングサーカスの舞台だ。この1年、雑誌の中で飽きるほど見てきたそれが、今日の前に浮かんでいる。

海辺に行けば飛んでる人を見かけることはあるけど、小学校の通学路や家の近くは飛行規制がされている。なので、フライングサーカスを実際に見る機会というのはあまりない。

あとそれに……。実際に飛んでるのを見ちやうと、我慢できなくなっちゃいそうだったし。

「よう、白瀬。休憩中か？ 各務は……見当たらないようだが？」

先生はグラウンドの端に座り込んでいる体操服姿の男子生徒に先生が話しかけた。先生の影に隠れながら、俺もそつと男子生徒の足元に目を向ける。あれは、インベイドのオールラウンダー向けのハイエンドモデルの一つ、テイルヴィング。オールラウンダー向けではあるものの、スピダーにも負けない速度も出せるモデルだ。

「ああ、先生。葵なら、ちよつと飛んでくるつて言つて」

と、白瀬と呼ばれた男子生徒はブイの方に視線を向ける。俺も誘われるように同じ方を向いた。

ああ、あれは……。あの一直線に伸びる力強いコントレイルは、間違いない。

「各務、葵さんだ……」

各務葵さんのグラシユ、紅燕はオールラウンダー向けのものだけど、スタート直後からまるでスピダーのような速度で飛び出した。いや、並のスピダーでは置いてけぼりにされてしまうほどに速い。そこから下向きに緩やかな弧を描いたかと思えば、更に加速して上昇しながらブイをタッチ。そこからブイの反発も利用して次のブイに向かいながら上昇、そしてちよつとラインの真ん中まできたところで、次のブイに向かって一直線に降下する。

すごい。スタートの時も速かったけど、ファーストブイにタッチする時にはもつと速く、セカンドブイにタッチする時にはもつともつと速くなっている。いったいどこまで速くなるんだろう。

しかしそう思った次の瞬間には、一気に半分以下まで減速していた。いや、違う。減速なんてしていない。一直線に伸びていたコントレイルは、鋭角的な角度でジグザグの光跡に変わっていたのだ。更に今度は上へ、その次は下へ。左右の動きに加えてほぼ垂直な上下の動きまで加わる。

こんな動きができるようになったら、背中へのタッチだけでどれだけ得点が取れるだろう。去年見た秋の地区大会よりも更に磨きがかかっているのが、ついこの前グラシユを履き始めた俺にもわかった。

憧れていた各務葵さんが、目の前で飛んでいる。言葉すらでてこない。俺はただただ空に、そして各務葵という選手に見とれていた。

「ん？ 先生、その子は？ 先生の子供……ってのはないですよ。確か独身だつて言つてましたし」

「ああ、この子か。ちよつと高校時代の友人に頼まれてね。白瀬、各務を呼んでくれないか？」

「ええ、いいですよ」

白瀬さんは脇に置いていたヘッドセットを取ると、マイクに向かって話しかける。

「葵、先生が呼んでるぞ」

そして、俺の方に向かってにっこりと微笑んだ。

「たぶん、お前にお客さんだ」

黄色いコントレイルは上昇しながら少しづつ減速し、そしてこちらに向かって緩やかに降下してきた。

Chapter 3

すたつと、まるで重力など感じさせない動きで各務葵さんは降りてきた。

「どうしたんですか、先生。あ、もしかして隼人が小テストで赤点でも取ったんですか?」

「お前と一緒にするな。そつちこそ、空を飛ぶこと以外頭に入つてないじゃないか」

「失敬な。さすがに赤点取ったりはしないさ。……たまにヤバいことはあるけど」

先生の前で軽口をたたき合う二人に、俺はただただ圧倒される。この白瀬つて人も、各務葵さんと似たような感じがする。何かを超越したような、オーラ? みたいな。

「で、他の連中はどうした?」

「先輩は1年生を連れて、浜辺でランニングしてますよ。もう少ししたら、帰ってくると思いますけど」

と、先生の質問に答える白瀬さん。そうだよな、FC部なんだから2人なわけはないもんな。

「そうなのか。まあいい。各務、ちよつといいいか?」

「はい、私に何か用事でもあるんですか?」

「ああ。私ではなく、この子なんだがね」

先生に背中を押されて、俺は各務葵さんの前に立つ。今日はライディングスーツではなく、学校指定の体操服姿をしている。それでも、その存在感が霞むことはない。

まるで夢を見てるみたいだ。俺が、こうして葵さんと会うことができると。

「この子は、日向昌也くん。私の高校時代の友人の子供だ。つまり、君達にとつての先輩のお子さんでもあるわけだな」

「日向、昌也ねえ……」

「去年の秋の地区大会で君を見て、どうしても空を飛びたくなくなってしまったそうだ」

「ほほー。そうかそうか。いや、女子からはよくモテるんですがね……」

各務葵さんは中腰になって俺の顔をのぞきつつ、

「まさか、こんな小学生までとは思いませんでしたよ」

にかつと爽やかな笑みを浮かべた。男の俺でもドキツとするほどかっこいい。

い、いや、そんなこと、今はどうだっていい。せつかく話しかけてくれたんだ、お、俺も何か言わないと。でも、目の前には本物の各務葵さんがいるんだ。頭の中は真っ白になって、何も話題が思いつかない。おかしい、話してみたいことや聞いてみたいことなんていくらでもあったはずなのに、なんで出てこないんだよもう！

意味もなく口をぱくぱくさせることしかできない俺を見て、各務葵さんはケラケラと笑う。

「そんなに緊張しなくても、取って食ったりはしないさ。まあ？ 私是有名人だからな。無理もないかな？」

冗談めかして言っているのは、俺の緊張を解くためだったのだろうか。ずいぶん後になってからわかったが、この時の俺にはそこまで考えている余裕なんて全くなかった。

「昌也、だったな。そのバッグの中身はグラシユだろ？ 私にも見せてくれないか？」

「は、はいー！」

各務葵さんをお願いされて、俺は慌ててバッグからグラシユを取り出す。『MIZUKI』の『飛燕』シリーズの一般モデル。まさかこんな形で見られることになるなんて。

「ほう、『飛燕』とはなかなか渋いのを選んだな。もつとかっこいいデザインこいっのグラシユはあったと思うが、どうして飛燕にしたんだ？」

「……………か」

「『か？』」

「か、各務さんのと同じ『飛燕』シリーズのグラシユが欲しかったからです！」

い、言っちゃった。全然頭が回んなくて、本当のことをそのまま

ああ、もう幸せすぎてヤバい。てか、え？ 俺、葵さんと飛べるの？ さつき言ってたよね？ 一緒に飛ぶかって。

「それに、まだ50センチくらいまでしか」

「ああ、高度制限もか。隼人」

「わかった。昌也くん、ちよつとグラシユを貸してもらっていいかな？」

「あ、はい」

俺からグラシユを受け取った白瀬さんは、踵の部分をくいっと引って張って手元の端末とUSBケーブルで繋ぐ。

「そういえば、昌也くんはグラシユはこれが初めてなんだっけ」

「はい、そうですけど」

「感度も目一杯下げてあるな。とりあえず……初心者向けくらいの感度にして……高度制限もつとお。よし、はい、どうぞ」

白瀬さんは手早く設定を終えると、俺にグラシユを返してくれる。店員さんが間違っって怪我をしないよう、感度を最低まで下げてくれたみたい。それが普通の競技用グラシユレベルにまで戻ったとなれば、またバランスをとるのが難しくなりそうだ。

普通の靴からグラシユに履き替え、踵のスイッチを入れると靴の両側から光の羽が現れる。

「いよいよ、緊張の瞬間だ。」

『FLY』

ふわりと体が浮き上がる。重力から開放された体はしつかりとバランスを保ったまま、上昇を続けた。50センチが1メートルに、5メートルに、10メートルに、未だ体験したことのない高度までどんどん上がっていく。

「いいぞー、昌也。その調子だ」

にいつとイタズラっぽく笑った各務葵さんは、俺を安心させるように高さを合わせてゆっくり上昇してくれる。

「どうだ？ 思ってたよりも簡単だろ？」

「そんな、簡単じゃないですよ。う、うわつと!？」

両手両足を広げて大の字になり、必死にバランスをとる。この2周

間の練習のおかげもあって、基本姿勢はしつかり体に染み付いていた。もう少しすれば、基本姿勢でなくてもバランスが取れそう……取れると思う。

「いやいや、一気にこれだけ感度を上げててもバランスが取れているんだ。うまいもんさ。それじゃあ次は、ちよつと上半身を前に倒してみようか?」

「こ、こうですかって、うわああああっ!?!」

わずかに体を前に傾けると、自転車くらいの速度で前に進み始めた。

「慌てず、冷静に。地上と違って、ぶつかる物なんてないんだ。それに、いざとなれば私がかんとかしてやる。今は、姿勢を保つことだけを考えろ」

「は、はい。頑張ります」

基本姿勢を崩さない。前傾姿勢を維持。慌てず冷静に……。

まだフラフラするけど、体は真つ直ぐに進んでいる。しかも地上から50センチみたいなお世辞にも飛んではいけないような高さではなく、久奈浜学院の校舎よりも高い場所を、だ。

「いいぞいいぞ。なかなか上手いじゃないか。なら今度は、右肩をちよつと下げてみる」

「はいっ!」

水平に広げた腕を右側だけ少し下げる。すると体はゆつくりと弧を描き、右側に旋回を始めた。

「よーし、じゃあ次は反対側だ」

「はいっ!」

今度は右腕を水平に戻し、左腕をわずかに下げる。

「すげえ、すげえすげえすげえ!!」

右旋回していた体は、今度は左に旋回し始めた。すごい、自分が思った通りに飛んでいる。

直進、右旋回、左旋回を何度も繰り返し、それに慣れてくれば更に前傾姿勢になって速度を出す。フライングサーカスのそれと比べたらまだヨチヨチ歩きたいものだけど、今日はじめて地上から解き

放たれた俺にとって、思った通りに飛べるというのは大きな一歩だった。

「どうだ？ 初めて空を飛んだ感想は？」

「すっげえ楽しい！」

各務葵さんの方を向こうとしてくるくと回りそうになるも、基本姿勢をとって安定させる。よしよし、なんか今日だけでもうだいぶ慣れてきた。

「それに、グラシユがあれば行きたいどこにどこでも行けそうで、今からワクワクする！ まだ全然速くは飛べないけど、練習すれば飛べるようになるんだよね？」

「ああ、それくらいならすぐさ。どうする昌也？ もうちょっと飛んでみるか？」

それはとつても魅力的な提案だ。夢にまで見るほど憧れていた各務葵選手と一緒に、しかもこうしておしゃべりしながら飛び方まで教えてもらえるなんて。正直、本人を目の前にしても未だに信じられない。

でもこの場所に來たからこそ、もう一度確かめたいことがあった。あの時は下からただ眺めるだけだったけど、今はこうして同じ空にいる。

「……じゃあ、その。ちよつと、お願いが……えつと。あるんです、けど」

体中の勇気をかき集め、俺は各務葵さんを正面からじつと見つめる。

「ほほう。なんだ？ 言ってみろ。私にできることだったら、考えてやってもいいぞ」

「……………各務さんの、飛んでるところが見たい、です」

やっとの思いで、その言葉を口にした。そう、同じ空、同じワールド、この肌で感じられるこの距離感で、各務葵選手のフライングサーカスが見たい。

各務葵さんは意味がわからずぽかーんとしていて、やっぱり俺のお

願いの意味がわからないみたいでずっと首をかしげている。
でも、

「そんなお願いでいいなら、いつでも聞いてやる」

二つ返事で了承してくれた。頭を撫でようと手を伸ばしたみたいだけど、途中で引つ込めた。そしてフィールドのラインから少し離れるよう指示される。

そういえば、グラシユを起動中に触れると、反重力が反発しあつて弾かれるんだっけ。

「しつかり見ておくんだぞ」

各務葵さんはスタートラインまで移動し、そして、

「今日は、昌世のためにだけに飛んでやる」

一筋の光となつて駆け出した。まるで音を置き去りにするかのような凄まじい加速に、目が釘付けになる。地上からでも力強かったコントレイルの光が、10倍にも100倍にもなつて眼の前を通り過ぎた。最早、ただ速いという言葉だけでは言い表せないくらい速い。このまま加速し続ければ、光さえも追い抜いてしまふように思える。

各務葵さんはブイにタッチすると、今度はファーストラインを逆走し始める。きつと、一番近くで俺に飛ぶところを見せてくれるためなのだろう。これ以上ない、最高の特等席だ。

直線の急加速の次は、ブイにタッチした反動で斜め上に上昇。この動き、さつき下から見たやつと同じだ。ファーストラインの中間地点まで上昇すると、重力による落下エネルギーを使って更に加速しながらブイへと突っ込む。

ああ、やつぱり楽しそうだ。それに、背筋がゾクゾクするほど興奮する、体中の血が熱くたぎる。あの日感じたのは、間違いなんかじゃない。俺は飛びたい、フライングサーカスがやりたい。

そんな風に自分の中の思いを再確認していたせいなのだろう。ファーストラインを飛んでいた各務葵さんが、いつの間にか俺の方に向かつて飛んできていたのに気付かなかつた。

「わっ、あわわわッ!？」

ダメだ、ぶつかる。思わずガードするように両腕を目の前で交差す

る。しかし、いつまで経っても覚悟していた衝撃はやってこなかった。

「ふふふっ、こういう飛び方もあるんだぞ?」

それもそのはず。各務葵さんはぶつかる直前、最低限の旋回だけで俺の横を通り過ぎていったのだから。

「どうだった? 満足したか?」

俺を抜き去った後、大きく上にループして各務葵さんが戻ってきた。

「はい、めっちゃすごかったです……」

本当に目の前を通り過ぎていった姿があまりにも鮮烈すぎて、茫然自失してしまっている。あんな飛び方もあるんだ。とにかく、もう自分の中の思いを表現できる言葉が全く浮かんでこなかった。

俺が期待通りの反応をしているからなのか、各務葵さんはちよつと嬉しそうだ。

「私も、昌也と飛ぶのは楽しかったぞ。よかつたら、飛び方を教えてやろう」

「ほ、本当ですか!」

まさかすぎる申し出に、急速に現実に取り戻される。いや、本当に現実なのかこれ? 今日、こうして一緒に飛べただけでもすごいのに、これからも空の飛び方を教えてくれるって……。

「こんなことで嘘ついてもしようがないだろ。本当だよ。まあ、私も自分の練習があるから、ずっとという訳にもいかないんだがな」

それはもちろん、俺だって憧れの選手の練習の邪魔だけはしたくない。空いた時間にちよつと教えていただけで、十分すぎるくらいである。もちろん、俺はそのお誘いを二つ返事で受け入れた。

「よかった。断られたらどうしようかと思った」

「そんな、断るなんてあるわけないじゃないですか。ぜひ、お願いします!」

「ああ、よろしく。それじゃ早速なんだが、さっき私のこと『各務さん』って呼んだよな? これから楽しく練習する仲として、それは他人行儀すぎると思うんだ」

「それじゃあ、なんて呼べばいいんですか？」

と、そこで今日何度目かのいたずらっぽい笑みを口元に浮かべて、各務葵さんはこう答えた。

「私のことは、練習中は『お姉ちゃん』と呼ぶように」

名前を呼ぶのも緊張するのに、それはさすがにハードルが高すぎるのではないだろうか。自分が各務葵さんのことをお姉ちゃんと呼ぶところを想像して、急に顔が熱くなってきた。やばい、これ絶対耳まで赤くなってるやつだ。

だって、葵さんめっちゃこつち見て笑ってんだもん！

「返事は？」

こつちが黙っていると、容赦なく攻め立ててくる。逃げ場はない。それに、憧れの各務選手から直接飛び方を教えてもらえるチャンスなんだ。

恥ずかしいのを我慢して、呼ぶしかない。いや、ぜひ呼ばせてください。

「は、はい。お姉ちゃん」

「ん？ 声が小さいぞー。風の音でよく聞こえないなー」

「わかりました！ お姉ちゃんー！」

各務さ……お姉ちゃんは自分の両肩を抱いてぶるぶると震えていた。

「隼人を見ると、こういうのも悪くないなーとは思っていたが、かなりいいな」

海風が通り過ぎたせいでなんて言ってたのかよくは聞こえなかったが、とりあえず満足してくれたようだ。

「お姉ちゃんのこと、私から言い出したのは隼人にはナイショにしておいてくれ。二人だけの約束だぞ。わかったな？」

「わかったー！」

思わず指切りをしようとして触れたせいで、俺の体があらぬ方向へと飛んでゆく。各務さ……お姉ちゃんが基本姿勢、と叫んでいるのが聞こえる。

くるくるとコマみたいに回りながら降下していく中、夢のような時

間の始まりにオレの心は躍っていた。

Chapter 4

葵さんと一緒に空を飛んだ次の日から、俺の生活は本当に一変した。休みの日は久奈浜FC部の練習後の2時間、平日も部活の後に1時間、葵さんは付きつきりで俺に飛び方を教えてくれた。自分でも日に日に上手くなっていくのがわかるくらいで、それが楽しくて仕方なかった。

一緒に飛び始めてから2週間、グラシユを手に入れてからもう1ヶ月も経った。ううん、まだ1ヶ月しか経ってないと言うべきか。充実しすぎていて、もう3ヶ月くらいはグラシユを履いているような気分である。

今日は土曜日。久奈浜学院FC部は午前の練習で終了なので、午後から練習を見てもらえる。

「行つてきまーっすー!」

お昼ご飯を済ませると、俺はグラシユを履いて停留場まで全力でダッシュした。もう、普通の靴よりグラシユの方がずっと足に馴染んでいる。

停留場までつくと、空の状況を確認する。飛行規制も出てないし、近くを飛んでる人もいない。久奈島役場や葵さんから習ったルールをしっかりと実践して安全確認をしたとことで、グラシユのスイッチをオンにする。

『FLY!』

起動ワードを口にすると、重力から解き放たれた体がふわりと浮き上がった。続けて地面を蹴り、高く空へと飛び上がる。反重力の膜——メンブレン——が全身を覆うこの感じ、首のあたりがぞわぞわして癖になりそうだ。

海上まで出ると、久奈浜学院に向けて進路を取る。今日はどんなことを教えてもらえるんだろう。もう普通に飛ぶのは何の問題もないほどになった。というよりも、使っているのが競技用のグラシユというのもあるので、通学途中の中高生くらいなら簡単に追い抜いてしまえるほどには速くなった。上下左右の移動もスムーズにできるよう

になったし、基本的な動作はもう完璧なのでは？

まあそれでも、俺が理想とする飛び方にはほど遠いんだけど。8月の強烈な日差しに、全身から汗が吹き出す。それなりの速度で飛んではいるけど、メンブレンが全身を覆っているのもあって風はそれほど感じない。

もっと前傾で飛べばメンブレンの薄くなったところから風を感じることができるけど、その姿勢を維持するのは体力的にちよつとキツイ。それに、そんなに早く久奈浜学院に着いてしまつてが、早めに家を出た意味までなくなつてしまう。

せつかく空を飛べるんだから、もっと自由に飛び回りたい。

「よおし」

思い切り前傾姿勢になつて加速する。そこから徐々に角度を上げて前進から上昇に転ずる。体の向きがだんだんと真上を向いていき、ついには背中が下を向く。大きな円を描ききるまでもう少し、というところで……、

「おつ、おわあああああッ!?!」

急に体が空中で止まつたと思つたら、頭が下を向いて落下し始めた。でも、そこまで慌てるような高度じゃない。海面まではまだ距離がある。落下の速度を生かして加速を続け、十分に速度が乗つたところで水平飛行に移行した。

「うーん、宙返りをやるにはまだもうちよつと速度が足りなかったかあ……。でも、今の俺だとあれ以上速度は出せないし。葵さ……お姉ちゃんに聞いてみるか」

とはいえ、約束の時間まではまだ少しある。あちこち寄り道して空の旅を満喫しながら、ゆつくりと久奈浜学院に向かった。

久奈浜学院からほど近い砂浜、葵さんは防波堤の日陰で涼んでいた。横には飲みかけのスポーツドリンクと、食べ終わったサンドイッチの袋が転がっている。

「葵さ……お姉ちゃん！ 来たよー!」

解除キーを口にして砂浜に着地。数十分ぶりの重力に、思わずつん

のめってしまった。

「ああ、昌也。今日も元気だな」

「だって、教えてもらえるの、すっごい楽しみにしてたんだから」

居ても立ってもいられない俺を見て、葵さんは苦笑しながら立ち上がる。そしてもはや定位置となっている俺の頭に、ポンと手を載せた。

「教えてもらえるって、平日だってほとんど毎日教えてやってるだろう？」

「だって、平日だと部活が終わってからだから、時間短いじゃん。それに……」

「それに？」

「部活終わってからだだと、時間も遅いから。お姉ちゃんに迷惑かけたくない」

一瞬きよとなった葵さんだったが、すぐにゲラゲラと笑って俺の頭をくしやくしやと乱暴に撫でた。

「ごいつめえ。生意気に私に気なんか使って。そんな小難しいことなんか考えてないで、楽しそうに飛んればいいんだよ」

そして中腰になって俺と目線の高さを合わせてくれて、

「楽しそうな昌也が見れたら、私も元気が出るから」

な？ と優しくニカツと笑った。ああ、もう。なんなんだよ、すごい、かっこいいじゃんか。なんだか恥ずかしくてうつむきながらも、こくと頷く。

葵さんが難しいこと考えずに飛べって言うてくれるんだから、今日はとにかく好きにとぼう、そうしよう。俺にはよくわからないけど、それで葵さんがちよつとでも元気になってくれるんなら。

「じゃあ、飛ぶぞ。昌也」

「うん！」

二人で起動ワードを口にして、空へ上がった。葵さんの飛行姿勢を見ながら、俺もなんとなくそれに合わせて飛ぶ。

葵さんの飛行姿勢は、初心者の俺から見てもやっぱりきれいだ。たまに早く着いて久奈浜FC部の練習をちよつとだけ見せてもらっ

たこともあるけど、葵さんの飛行姿勢はその中でもやっぱり一番きれいだったと思った。

で、きれいだと思つて真似してみたら、今までより速度も出るし、安定して飛べるようになった……気がする。いや、飛行中にふらつくことは確かに少なくなったから安定してるはず！

「そうそう。お姉ちゃん、ちょっと聞きたいことがあるんだけど、いい？」

「どうせ飛び方のことなんだろう？ 昌也はそれしか聞かないからな。いいぞ、なんでも聞いてみな」

葵さんは半ば呆れるみたいなお調子だ。それもそもはずで、葵さんと一緒に練習を始めてからずっと、俺はグラシユの使い方のことしか質問してないからである。

でもなんかこう、プライベートのことを聞くのは気後れすると言うか、はばかられると言うか。それで機嫌を損ねちゃうのも嫌だし。

いや、葵さんがこんなことを聞かれたくらいで不機嫌になんてなるわけないのはわかってるんだけど、それでもやっぱり聞き辛いのだ。「えっと、これ、もつと速く飛ぶためにはどうしたらいいの？」

「これ以上か？ 今でも十分に速いと思うぞ？」

「えっと、笑わないで聞いてよ？」

俺はここに来る前、試しに宙返りをしてみようとして失敗したことを伝えた。

それを聞いた葵さんはやっぱり予想通りの反応で、

「っははは、そうか。失敗しちゃったのか」

小さくクスクスと笑った。でも、バカにしたような感じじゃない。懐かしむように目を細めながら、まるで本当のお姉ちゃんみたいに優しく俺の言葉を受け止めてくれた。

もしかしたら、むかし俺と同じようなことをして失敗したことがあったのかもしれない。

「じゃあよく見てろよ？ 私の特大の宙返りを見せてやる」

そう言うと、葵さんはいきなり速度を上げた。俺の2倍？ 3倍？ いや、それ以上のスピードだ。前傾姿勢というよりもほとんど海と

水平な状態で加速を続ける。そして十分に上にスピードが乗ったところで、戦闘機の航空ショーさながらにコントレイルの光を引きながら葵さんは上昇を始めた。すごい、俺のときと違って上昇中もほとんど速度が落ちていない。

体の角度はだんだんと急になっていき、水平だった体は垂直に、そこからやがて背中を海面に向けながら更に上昇していく。

「わああああ……………」

黄色いコントレイルが空に大きな円を描く。言葉も出ないくらいに、それは美しかった。

「どうだった昌也?」

「めつつつちやすごかった!」

特大の宙返りを見せてくれた葵さんは、ちよつぴり自慢げに鼻を鳴らしながら俺のところまで帰ってきた。鼻息荒く興奮している俺に、葵さんはそうだろうそうだろうと腰に手を当てて応える。

「ねえ、どうやったたら俺にもあれができる?」

「そうだな、昌也がさつき自分でも言ってたみたいに、速度が足りなかったのも理由の1つだろうな」

「1つってことは、他にもあるの?」

「実際に見てないからなんとも言えないが、心当たりならな」

「ここでいきなり答えを教えてくれないのは、この2週間の練習でわかってる。葵さんの指導はまず自分がやって手本を見せて、それから俺に実際に飛ばせて経験させて、ということの繰り返しだ。うまくいかなければコツも教えてくれるし、できるようになるまでずっと付き合ってくれる。」

だから2つ目の理由も今はわからないけど、この練習が終わる頃には実体験を伴ってわかるようになってるはず。

「じゃあ、まずは、もつと速く飛んで試してみよう。さつきの私の動きを見てたのなら、どうすればもつと速く飛べるかわかるよな?」

「うん!」

俺は上半身をだんだん前に倒していき、加速を始める。普段ならあの程度倒したところで止まるけど、今日は違う。普段は海面との角度

が30度になるくらいで止めるけど、まだまだ倒す。

そしてさっきの葵さんと同じくらい、海面とほぼ平行になるような角度にまで上体を倒した。今まで感じたこともないような速度に、少し寒気がした。

メンブレンが薄くなった頭の方では、周囲の音が聞こえなくなるほどの勢いで風が通り過ぎてゆく。この角度になると、ここまで風を感じるんだ。まるでブレーキのない自転車で、急な坂を下っているような気分だ。

速度は間違いなく今までで一番速い。よし、今度こそ！ 速度が落ちないよう、上体を起こしながら緩やかに上昇を開始する。さっきと違ってあまり速度が落ちていない、いい感じだ。

海面を映していた視界は次第に水平線を捉え、ついには青い空で埋め尽くされる。と、その時だった。青い空に見入っていたのは間違いないが、気を張っていなかったわけでもない。

なのに宙返りの頂点を目前にした時、急に失速して落下し始めてしまった。おつかしいなあ……。スピードは十分足りてたと思ったのに、なんで急に？

お腹の海面側に向け、両手足を広げてメンブレンを安定させる。するとそこへ、葵さんがやってきた。

「あゝあ、残念。あともう少しだったのにな」

「うん、途中までは良かったんだけど、最後にいきなりうスピードが落ちちゃって」

「なんだ、原因がわかってるんじゃないか。それじゃあ、一緒に考えてみようか」

放り投げられたスポーツドリンクを受け取って一口飲み込むと、それに大きく頷く。実践の後の考える時間だ。今日までに何度も繰り返ししてきたけど、この考える時間はけっこう好きだ。

こんがらがったロープがほどけていくみたいな感じで、わからなかったことが経験を伴って『わかる』のがすごく面白い。

「まず、初速は十分だった。私から見てもよく飛んでいたと思う」

「そうだよね。俺、あんなに速く飛んだの初めてだったもん」

「つまり、原因は他にあるってことだ。じゃあ質問を変えるが……。昌也、速く飛ぶために大切なことは何だ？」

「飛行姿勢！」

この質問の答えはすぐに出てきた。実際、葵さんの飛行姿勢を意識して飛んでたら良くなってるんだから間違いない。空を飛ぶ上で、基本中の基本と言っているいだらう。

「そうだ、飛行姿勢が悪いと左右にふらついてしまう。それにグラシユは急な方向転換が苦手だから、速度も落ちる」

「うん、お姉ちゃんに何回も教えてもらった」

「そうだな。じゃあ、宙返りをしている最中の飛行姿勢をもう一度思い出してみようか？」

「宙返り中の、飛行姿勢……」

というわけで、今日の2回の宙返りについて思い返してみる。

宙返りの最初の方は問題なかったはずだ。普通に飛んでいる時も飛行姿勢は意識しているし、きれいな飛行姿勢じゃないとそもそもスピードが出ない。

次に海面と垂直になったタイミング。この時もまだちゃんとしていたはず、現にスピードはほとんど落ちていなかった。じゃあ失速した直前はどうかだろう？

「……あれ、どうなってるんだろ」

「気付いたみたいだな」

俺の考えに気付いたららしい葵さんは、二つと口角を持ち上げた。

「宙返りの頂点付近の飛行姿勢、自分でもわからないだろ。普段と逆の姿勢で飛んでるから、まだ頭と体がついてきてないんだ」

「そうなんだ……」

「でも、わかっただけじゃ簡単だ。上下が逆になった時にもいつもの飛行姿勢を意識すれば、できるはずさ。じゃあ、原因がわかったところでもう1回トライしてみよう」

「はいっー」

やっぱり葵さんと飛ぶのは楽しい。俺はさっそく教わったことを実践すべく、思い切り前傾姿勢になって加速した。

葵さんのアドバイス——体が上下逆になってからの飛行姿勢を意識しただけで、宙返りは簡単に成功した。それが楽しくって3回も4回も繰り返していたらさすがに疲れちゃったので、今日はこれで終わり。

今は体をクールダウン？ させる目的で、フライングサーカスで使うフィールドの回りを周回している。

「それにしても、この2週間でかなり上手くなったな」

「え？ほんとに？」

「ああ、びつくりするぐらいの上達ぶりだ」

「よっしあああ！」

葵さんに太鼓判を押ししてもらった。それが無性に嬉しくて思わずガッツポーズをしてしまった。そしてそのまま調子に乗って葵さんの回りをくるくる回る。学校のテストで100点を取るより嬉しい。「それだけ飛べれば、もうどこへだって行けるぞ。空には道なんてない、昌也が飛んだ場所が道になるんだからな」

「うん。そう……だね」

認められたことは素直に嬉しい。でも、それと同じくらいの寂しさも浮かんできた。だって葵さんに認められるってことは、この時間が——一緒に飛んでいるこの時間が終わってしまうことを意味しているんだから。

その事実を認識してしまった瞬間、心の中の飛びたいと言う思いがもつとはつきりした形になっていくのを感じた。

空を飛びたいと思った。空を飛ぶことを一番楽しむために、フライングサーカスをしたと思った。一年前に地区大会で葵さんの勇姿を見た時から、あんな風に飛べたらいいなと思っていた。

でも、今はもうちよつとだけ違う。葵さんのように飛びたい、葵さんのように飛んで、フライングサーカスがしたい。スピードを競い合ったり、背中を取り合ったりする真剣勝負がしてみたい。

今のよう飛ぶことも決してつまらなくなっていない、むしろ今まで感じたことのないくらい、刺激的で楽しい。でも、間近で葵さんや他

の人がフライングサーカスという競技に打ち込む姿を見て、思ってしまったのだ。

俺も、あの場所に行きたい。単なる空への憧れだけでなく、あの正方形のフィールドで火花をちらしてみたいと。

「お姉ちゃん、お願いがあるんだけど……」

俺は空中で停止して、葵さんへと向き直る。この感じ、初めて久奈浜FC部に来て、葵さんの飛んでるところを見たいとお願いした時みたいだ。夏の熱気も合わさって、のどがひりつくほどに乾いている。

「なんだ？ 言ってみろ」

葵さんも俺の真剣な雰囲気を感じてか、いつもの半分茶化すような感じはない。真剣な表情で俺のことを見ている。もっとも、今はそれも葵さんなりの照れ隠しだってことは俺にもわかってる。

だから、こうしてちゃんと聞こうとしてくれるのは、本当に嬉しい。だから、俺も……。

「お姉ちゃん、俺に飛び方を教えてよ」

「教えてるじゃないか、こうやって」

そんなことはわかっている。この2週間、自分の練習の前後にずっと親身になって教えてくれた。空を飛ぶための方法を、空が楽しいと思える飛び方を。

だから……、

「そうじゃなくて、その……。フライングサーカス、教えて欲しいんだ」

「へえ……それはまた。どうして、私なんだ？」

そんなの、ずっと前から決まっている。

だって……、

「だって、お姉ちゃんは、俺が飛ぶきっかけになった人だから」

地区大会で見たあの日から、俺は各務葵という選手に夢中になっていたのだから。

各務葵という選手のように飛びたいのだから、あなたじゃないとダメなんだ。

「……………」

どうにか堪らえようとしたけど、無理だったらしい。破顔したと思っただら、葵さんはお腹を抱えて大声で笑いだした。

「あはははっ、ははははっ……」

「な、なんで笑うのっ……!」

「ごめんごめん、昌也がいきなり真面目ぶった顔で言うから、おかしくてな」

「もう……本気なんだよ、俺」

「……わかってる。すまなかった」

呼吸を整えた葵さんは、澄んだ瞳で俺のことを見つめてくる。

確かに言った。『わかってる』って。俺の本気のこの気持、俺が口にする前から『わかってる』って。

「えっ、それじゃ……」

「ああ、飛び方を教えてやるよ。どこまでも楽しく、飛び回れる方法を、な」

まるで、新しい世界の扉が開かれたようだった。俺がいま一番言つて欲しい言葉を、一番言つて欲しい人が言ってくれた。全部の感情が消えて、心の中が真っ白になって……。そしてようやくぽつりと嬉しさが浮かび上がり、波紋のように一気に広がる。

両手でも抱えきれないほどの嬉しさに、胸がいっぱいになった。

「あつ、ありがとう、お姉ちゃん!」

ああ、と応える葵さんも、本当に嬉しそうにしていた。やった、これでまだ、葵さんと一緒に飛べる。それだけじゃない、葵さんにフライングサーカスを教えてもらえる。

あの日、見上げた空で誰よりも力強く飛んでいた、憧れの人に。感情が爆発して、自分でも抑えられない。

「じゃあ、教えるにあたって、まずはとっておきの言葉を教えてやろう」

「言葉……?」

「ああ。辛いことがあっても、悲しいことがあっても、力が湧いてくる言葉だ」

「すごい、教えてっ!」

「よく聞くんぞ……」

その言葉は自分でも信じられないくらい、すつと胸の中に落ちた。これから先、どんな事があっても、その言葉は俺に力を与えてくれるに違いない。

葵さんから渡された言葉を胸に、俺のフライングサーカスは静かに幕を上げた。

第2話：飛翔姫のサーカス

Chapter 1

俺が葵さんにフライングサーカスを習い始めて早くも一週間が経った。小学校の終業式は3日前に終わっている。つまり、待ちに待った夏休みの始まりだ。

もちろん、宿題の方も順調に終わらせている。というよりも、毎日宿題をちやんとするということのも、葵さんがフライングサーカスを教えてくれる条件に含まれていたからである。じゃないと多分、一日中飛んでいたかもしれない。いや、間違いなく飛んでいただろう。

まあそんなこともあって、夏休みの宿題は今までで一番順調に消化中。そっちはいいんだよ、うん。問題は、本題のフライングサーカスの方。

「とおoryあああああああああつ！」

なぜか俺はグラシユを履いたまま、久奈浜の海岸を全力でダツシユしていた。

「ふんがああああああああつ！」

葵さんがホイッスルを吹いたら止まって休憩、でも10秒ほどしたら一度吹かれてまたダツシユを10秒、それからまた休憩を10秒……。

「んんにゃあああああああつ！」

辛くてちよつとでも速度を落とそうとしたら、

「昌也——！　それがお前の全力か——！　そんなんだとあと5本追加するぞー！」

「葵さんのおにいいいいいいいっ！」

俺は最後の力を振り絞って足を上げ、腕を振り、思いっきり砂浜を踏みしめて走った。

「ようし、休憩にしよう」

ぜえ、ぜえ、ぜえ、ぜえ、よ、ようやく……終わった。肩で息をしながら、俺はいつたん葵さんのところまで戻る。防波堤の日陰で一息

ついていると、冷たいスポーツドリンクを渡してくれた。

「んん、ん、つぶはあああ」

カラカラに乾いた体に、冷たい水分が染み込んでゆく。スポーツドリンクって、こんなにうまかったんだ。それにしても、納得いかないことがある。

「ねえ、葵さん」

「なんだ昌也。もしかして、宿題でわからないところでもあったのか？」

「違う、別にわかんないとかかないし。つて、そうじゃなくて！」

と、俺は葵さんの前に回り込んで声を大にして抗議した。

「俺、フライングサーカスを教えて欲しいって言ったよね！なのにどうして空を飛ばずに、走らなきゃいけないんだよ！」

そう、夏休みに入ってから時間に余裕ができたのはいい。でも、俺はフライングサーカスを教わりたいたのであって、陸上選手になりたいわけじゃない。準備運動のあとは、だいたい5分〜10分くらいだとうか。一度へとへとになるまで、短距離ダッシュを繰り返すという練習をしているのだ。

「そのことなら、昨日も説明したと思うんだが？」

「うん、聞いた……。聞いたけど、なんか思ってたのと違う」

「そうは言っても、これは基礎の基礎みたいなものだぞ？」

つと、葵さんはこの数日で耳にタコができるくらい聞いた説明をまた繰り返す。

「スポーツ全般に言えることだが、体力がないと最後まで力を出しきれない。そうは言っても、フライングサーカスはマラソンみたいな持久力が必要なスポーツじゃない、瞬間的な力を継続的に出す類の体力が必要になる。例えば、昌也が文句を言ってる短距離ダッシュみたいな、な、な？」

『な？』じゃないんだよ、『な？』じゃ。それくらい、俺だって頭ではわかってるんだつての……。

「それに、スタートも重要な要素だ。ホーンの音にどれだけ早く反応できるか。この2つを同時に鍛えるのに、この練習はちょうどいいん

だよ」

うん、それも聞いた。もちろん、理屈ではわかっている。動画サイトで葵さんの試合を何度も見てきたけど、どれもホーンが先なのか葵さんが先なのかわからないくらい完璧なスタートだっけ。いつも思ってた。

「この2つを重点的にやってくと、もっと実践的な練習になった時に役に立つ。簡単にへばらなくなったり、相手の動きに反応したり」

でも、だから思う。こんなダツシユを繰り返すだけの練習で、本当に葵さんみたいに飛べるようになるのかなって。なんかもつとこう、誰にも秘密のすごいトレーニングがあるんじゃないかって思ってた。

それが蓋を開けてみたらなんか陸上部みたいな練習を毎日繰り返して。すげー地味だし、期待してたのと違ったと思っても仕方ないことだろう。

「でもまあ、地味でつまらないのは、私も昌也の言う通りだと思うけどな」

でも、今日はいつもとちよつとだけ違った。肩に置かれた葵さんの手が、ぷにぷにと俺の頬を突つついた。

「よっし。じゃあ休憩が終わったら、今度は空だ。希望通り、たっぷり指導してやるから覚悟しろよ?」

「よっしやあつ! やつと飛べる!」

今すぐにも飛び出そうとする俺の首根っこを掴まえて、その場に座らせる葵さん。休憩も練習の内だから今ははっきり休むようにと、きつくお叱りを受けるのであった。

たっぷり水分と塩分と休憩をとったあと、俺と葵さんは空へ上がった。今はファーストブイの横で葵さんから説明を受けている。しかもなんと、今回は基本とはいえ、ついにフライングサーカスの技を教えてくれるそうだ。

「昌也もかなり飛ぶのに慣れてきたようだし、そろそろ教えてもいいタイミングだと思っただけな」

「それで、何を教えてくれるの?」

「基本的な加速技術、ローヨーヨーだ」

「ローヨーヨー？」

英語なんだろうけど………全然意味がわからん。

「スーパージョーヨーなら、父さんが持つてるけど？」

「いや、そのジョーヨーは違うな」

てかよくそんなオモチャ知ってるな、と葵さんは苦笑している。

まあ、俺も遊んだことはないんだけど。父さんが言うには、紐で引っ張ってくるくる回すオモチャらしい。

「ローヨーヨーは、重力の力を使った加速技術の1つ。斜め下に飛ぶことで重力の力を使って加速して、十分に速度が乗ったところで上昇する。ただ単にまっすぐ飛ぶより、この方が速く飛べるんだ。遠回りのような気もするが、グラシユの力だけで加速するよりずっと早く最高速まで持つていける」

「へええ。なんか真っ直ぐ飛ぶほうが短いから速い気がするけど、そうじゃないんだ」

「まあ、グラシユを履いてないんだつたら違うのかもしれないが、フライングサーカスに関して言えば、重力を利用したほうが加速しやすいのは確かだ。じゃあ、私の姿勢を真似しながら飛んでみよう」

説明もそこそこに、俺は葵さんに倣って飛行準備に入る。陸上のクラウチングスタートの要領で構え、隣の葵さんの一挙手一投足を見逃さないよ目を凝らす。

「じゃあ、いくぞ………」

まるで呼吸でもするような自然な所作で葵さんは飛び出した。あまりに自然すぎる動きに、思わず見入ってしまう。それに少し遅れて、俺もスタートした。

安定してきたとはいえ、それはただ空を飛ぶだけに関して。フライングサーカスという競技レベルで見ればまだまだ。特にスタート直後のスピードが乗り切っていない状態は、バランスをとるのが難しいのである。

「大丈夫だ昌也、ゆっくりついてこい。姿勢に注意してな」

「は、はいー」

葵さんは最高速を出さず、あくまで俺がついていけるギリギリの速度で少し前を飛んでいる。とはいえ、普段の移動中に比べたら倍以上の速さだ。

胸をやや下に向け、葵さんを追って緩やかな下降曲戦を描く。身体はほとんど一直線、まるで頭から落下しているみたいな速度で顔の横を風が通り過ぎてゆく。この速度で下に向かって飛ぶのは、まだちよつと怖い。

でも、ちよつとでも加減すれば葵さんに置いていかれる。せつかく新しいことを教えてくれてるんだ、置いていかれてたまるか！

少しでも追いつけるように、必死になって葵さんを凝視する。腕の角度は？ 指先はどこにある？ 足の向きは？ 視線の位置は？

少しでも違ふところがあれば、自分でも分かる範囲で少しずつ修正。そうする内に、ほんのちよつとだけ葵さんとの距離が近づいてゆく。

「よし昌也、スピードが乗ってきたところで、次は上昇だ。姿勢を崩さないように注意しろ」

「は、はいッー！」

確かにこれは、今まで経験したことのない速度だ。重力を利用した加速って、ここまですごいのか。

葵さんが声を張ってくれているおかげで、辛うじて指示が聞き取れる。今は進行方向——頭の方のメンブレンが薄い影響で、これまで経験したことのないレベルで風が通り過ぎていく。車の窓を開けて走ったって、ここまでの音はしない。

そんな中、自分の姿勢を把握するのは思っていた以上に難しい。胸を少しそらし、下向きから水平に、そして上向きへとゆっくり姿勢を変えてゆく……つもりだったのだけれど。

「ん、んんあああッ!!」

下降から水平飛行へ移る途中、葵さんとの距離がまた開き始めた。理由は簡単で、俺が飛行姿勢を保てなかったから。堪え切れずにいきなり水平飛行の姿勢に移ったせいでメンブレンが乱れ、減速してしまったのである。

でも、速度はまだ十分に残っている。ここから取り返してやるぞ。水平飛行に入ったところで、今度はゆっくりと胸を上側へとわずかにそらす。よしよし、今度はスムーズに姿勢が変更できた。目に見えた減速をすることなく、頭は斜め上の方向へ。視線の先には、既に上昇を始めた葵さんの姿があった。

「おおお……」

これがローヨーヨーか。その効果を、俺はしっかりと肌で感じていた。下降速度もそうだったが、上昇速度も今までに経験したことのないレベルだ。というより、真つ直ぐ飛ぶより断然速い。後ろに流れていく浜辺の景色が、いつもと全然違う。

重力の力、恐るべし。といったところかな。そして、

「まあ、初めてにしては……まずまずつてところかな」

「はあ、はあ、あ……ありがとうございます」

上昇仕切ったところでセカンドブイにタッチ、ゆっくり減速しながらサードブイで待っている葵さんの元へと向かう。

「まだ始めたばかりつてもあるが、姿勢を維持し続ける体力が足りないな。まあ、筋トレをするほどでもないから、繰り返し練習していけばその内できるとなるさ」

「お、思ってたより、体力、使いますね……」

「そのためのダツシユの練習なのさ。腕と足をしっかりと振つてやれば、飛行に必要な筋肉もついてくる。とまあ、練習の意義がこれできっちりわかっただろうから、これからは文句を言わずしっかりと励むように」

「わ、わかりました」

今以上に腕や足をしっかりと振つてダツシユか……。俺、死ぬかもしれない。いや、ホントに死んだりするわけじゃないけどさ、それ終わったら手と足が棒になってそう。そんなんで本当に飛べるの、俺？「じゃあ、さっきの要領でローヨーヨーをあと10本。さっきよりちよつと速度を落とすから、私の姿勢を見ながらキツチリ着いて来いよ？」

「ぜ、善処します」

結局10本以上ローヨーヨーを繰り返した俺は、へとへとになって家へと帰る。

ちなみに練習後に真っ直ぐ飛んだ時間とローヨーヨーで飛んだ時間を測ったら、疲れ過ぎたせいで真っ直ぐ飛んだほうが速いタイムになってしまい、葵さんがちよつと焦ってたりした。

Chapter 2

宿題とフライングサーカス三昧の夏休みも、気付けば半分が過ぎようとしていた。つまり、もうすぐお盆がやってくる。朝起きれば小学校へ行ってラジオ体操、朝ごはんを食べたらお昼まで宿題、それからフライングサーカスの練習というサイクルにもすっかり慣れた。

なんというか、うん、間違いなく俺は今ままで一番充実した夏休みを過ごしていた。文武両道的な意味で。

そして今日も……、

「ツタツチー！」

俺はフライングサーカスの練習に打ち込んでいた。

「はああ、はああ、葵さん、ローヨーヨーとハイヨーヨー、4本ずつ、終わったよ」

「おつかれ、昌也。まあ、ちよつとは様になってきたかな」

ダツシュ練習の割合は少しずつ減っていった、今は練習の開始5分弱で終わり。それからフライングサーカスのブイに沿って飛ぶフィールドフライを、葵さんが良いと言うまで続ける。それもブイを1周する時間が決まっっていて時間経過と共にだんだん短くなるという、シャトルランのフライングサーカス版的なもの。

体力のきつくなる後半ほど1周の時間が短くなり、焦って無理な加速をしようとして姿勢が崩れて、その度に葵さんに注意されて姿勢を直す。それが終わればローヨーヨーとハイヨーヨーを4本ずつ、つまりフィールド2周分。それから休憩を挟んでまたフィールドフライにローヨーヨーとハイヨーヨーのセットを俺がくたびれるまで繰り返す。

まさに、地獄の特訓メニューだ。

「も、もう無理……」

「ははは、これだけ飛ばばそうなくても仕方ないか。じゃあ、今日はこれで終わりにしよう。クールダウンに、ゆっくりフィールドを飛んできな」

「はーい」

フライングサーカスは、四方のブイにタッチして獲得する得点以外にも、相手選手の背中をタツチして獲得する得点もある。その背中を取り合って飛行するのを戦闘機になぞらえてドッグファイトっていうんだけど、今の所そっちの練習はさっぱり。

今はとにかく飛行姿勢を徹底することと、加速の基本技術であるローローヨーとハイヨーヨーの練習をひたすら繰り返している。まあ、それも嫌ってわけではない。

フィールドフライは1周の時間が決まっていてその時間内に周回しているわけだけど、1周するのにかかる時間は少しずつ短くなってきた。これも葵さんのご指導の賜物だ。

まあ、あれだけ飛行姿勢を矯正されてタイムが良くならなかったら、静かなお顔して雷が10発くらい落ちてきてもおかしくはないんだけどさ。

「ふうう、これくらいかな」

ゆったりとしたフィールドフライで乱れた息も整ってきたし、そろそろ降りよう。葵さんは既に降りていて防波堤の影で一息ついている。

「あ、白瀬さんだ」

葵さんの隣に、よく一緒にいる久奈浜FC部の男子選手——白瀬さんがいた。最近は俺と葵さんの練習もちよくちよく見に来ている。

「こんにちは、白瀬さん」

「やあ、昌也くん。今日も頑張ってるね。はい、これ差し入れ」

「ありがとうございます」

解除キーを口にして砂浜に降りると、白瀬さんからマグボトルを受け取って一口飲む。

「マスカット味だ、さっぱりしてて飲みやすい」

「この炎天下で、ココア味はちよつときついと思ってるね。今日はマスカット味のプロテインを作ってきたんだけど、どうかな?」

「ココア味もいいですけど、練習の後はこっちのほうが飲みやすいです。ん?」

するとそこで俺は、白瀬さんの後ろにもうひとり誰かが隠れている

のに気付いた。

「ほら、みなも」

白瀬さんに背中を押されて出てきたのは、白いワンピースの女の子だった。背は俺より一回り小さいくらいかな、大きなトートバッグを両手でぎゅっと抱えている。麦わら帽子を目深にかぶっているから顔はよく見えないけど、この子はいったい？

「あ、あの……。白瀬、みなも……です」

緊張のせいで声はひどく震えていた。自己紹介の時は頑張っつてこつちをみてくれたけど、終わった途端にトートバッグに顔をうずめてしまった。それでも耳まで真っ赤になっているのがわかる。

「ちよつと歳は離れてるかもしれないけど、俺の妹。たぶん、昌也くんの一つ下になるかな。まあ、仲良くしてやつてくれると、嬉しいかな」頭をわしやわしやされてる？ みなもちゃんは、『もお、お兄ちゃん……』と口をとがらせながら白瀬さんを見上げて抗議。でも俺に視線を戻すと……。そのまま白瀬さんの背後に。

ものすごい恥ずかしがり屋さんみたいだ。さつき白瀬さんが心配そうにしてたのはこれが理由か。

「えつと、みなも……。ちゃん？」

「ッ!？」

白瀬さんの後ろで、ビクつてみなもちゃんの肩がはねた。

それから、じいじい……。白瀬さんの横からちよこんと顔をのぞかせてこつちの様子をうかがっている。

「俺は、久奈島小4年生の日向昌也。よろしく」

「よ、よろしく……。お願いしま、す」

みなもちゃんと仲良くするには、まだまだ時間が必要そうだ。

「隼人、みなもちゃんが持つてるのは例の？」

「ああ、昨日やつと届いたんだ。はやく見せてやりたいだろ？」

俺とみなもちゃんが異種接近遭遇的なコミュニケーションの手段を模索している最中、頭の上の方では葵さんと白瀬さんがなにやら不穏な会話をしている。見せてやりたいって、一体何のことだ？

そう思っていると、白瀬さんはみなもちゃんの手を引いて、防波堤

の向こう側へ行ってしまう。そして何か耳打ちをしているようだが。ちよつと気になって葵さんを見上げてみると、ちよつと待つてなさいとウインクしてきた。まあ、俺も日陰でもうちよつと涼みたいし、終わるまで静かに待つてよつと。

それにしても、このプロテイン飲みやすいな。今度、白瀬さんのところに行つてみようかな。お父さんがスポーツショップをしているみたいだし。

「そうだ昌也。次の練習なんだが、盆明けまで休みだから再来週の月曜になる。もし明日間違つて来ても、私はいないからな?」

そうそう、夏休みも半分ということは、もうすぐお盆の時期だ。うちは父さんも母さんも四島の出身だから自宅でゆっくりしてるけど、クラスの半分くらいは親戚の集まりとかで本土の方へ出かるらしい。葵さんも四島の出身だからお盆も島にはいるけど、親戚が帰つてくるつてので家の手伝いで忙しいのだそうだ。

「わかつてるよそれくらい。葵さんこそ、再来週の月曜日にはちゃんとしてよ?」

「もちろん、この私が忘れるわけ無いだろ。もつとも、昌也がちゃんと夏休みの宿題を済ませなかつたら、どうなるかわかつたもんじゃないんだが?」

「へつ、それこそ問題ないもんね。もうほとんど終わつてるしい」
ほんと、葵さんとの約束がなかつたらどうなつていたことか。去年までのことを思い出して、ちよつと寒気が……。今までは夏休みのはじめにちよつと手を付けたら、お盆が開けるまでずっと遊んでたもんなあ。

「そうかそうか、それなら安心だな。いやー、昌也のご両親からも色々頼まれてるからなあ。フライングサーカスをやるのはいいが、勉強のほうが疎かになつたりしないかって」

い、いつの間にそんな密約を……。そ、それでか! 葵さんがフライングサーカスを教える条件に夏休みの宿題をやるように言つてきたのは! は、ハメラれた……。これが大人のやり方か! 汚い! 大人つて汚い!

「新学期に入ってからとはともかく、夏休み中はその手の心配はしなくても良さそうで、私もホッとしたよ」

「それに関しては……俺もホッとしています」

と、一言ぼそり。今までの俺の夏休みの宿題事情を聞かされたのか、葵さん苦笑いしている。ううう、なんかわからんけど、葵さんには知られたくなかった。

「お待たせ、二人共」

と、次の練習日の話をしてたら防波堤の向こうから白瀬さんとみなもちゃんが戻ってきた。

「ほら、みなも。大丈夫だから」

頑張ってきたな、と白瀬さんはみなもちゃんの頭を優しく撫でた。それに勇気をもたらったのか、みなもちゃんも大きくうなずいて白瀬さんの後ろから出て俺の目の前までとことこと歩いてきた。

「あ、あのー」

「はい」

力強い声に、思わず敬語になってしまった。

さつきと違って、うるませた目でじいっとこつちを見上げている。

「これ、受け取って……ください！」

ありつたけの勇気を振り絞って、抱いていたトートバックを俺へと差し出す。

あ、これ俺にだったんだ。

「あ、ありがとう。えっと、これって？」

持った感触は、大きさの割にかなり軽い。普段背負っているランドセルのほうが重いくらいである。

「ふ……ふらいんぐ、すーつ」

「ふらいんぐ、すーつ………フライングスーツツ?!」

みなもちゃんの言葉がちゃんとした意味になるまでしばらく時間がかかってしまったが、え？ マジで？ マジマジのマジでそうなの？

慌ててトートバッグの中に手を突っ込み、中の物を取り出す。

「うおおお……」

言葉が出なくなるって、こういうことを言うんだな。

黒のインナー、白地にグラシユと同じわずかに緑がかったライトブルーの縁取りが鮮やかなフライングスーツが入っていた。

「昌也のお父さんから頼まれてな。その内、試合もやることになるだろうから、ユニフォームは必要だろ？」

「ははは。これじゃあ昌也くん、今からお盆明けの練習が待ち遠しくなっちゃうかな」

もう、父さんもわざわざ秘密にすることなんてないのに。豪快に笑う白瀬さんの声を聞きながら、ここ最近の父さんの様子を思い出す。

そういえば、最近口数が少なかったような気がする。きつと話始めちやうと口が滑っちゃうと思っただんだろうな。葵さんに教えてもらい始めてから、フライングサーカスの話しかしてないし。

「でも、こういうのは早く着てみたいと思っただけ」

「ありがとう、白瀬さん！ それに、みなもちゃんも！」

ああもう、嬉しい気持ちを抑えられない。改めて白瀬さんとみなもちゃんの方に向き直ってお礼を言った。

「わ、わたしは持ってきただけ、だから……」

でも、直接渡してくれたのはやっぱりみなもちゃんだから、ちゃんとお礼は言わないとね。くそ、ここに更衣室があれば今すぐ着替えられるのに。

とりあえず、帰ったらすぐ着てみよう、必ず着よう、絶対着ようそうしよう。

「おつとすまん。親父から電話だ」

白瀬さんのポケットから軽快な着信音が。急用らしく、白瀬さん電話のためにこの場を離れる。すると当然、みなもちゃんが隠れる場所もなくなってしまうわけで。

唯一の防御手段だったトートバッグも今は俺の手の中なので、見ているこっちが心配になるくらい、みなもちゃんはオロオロとし始めてしまった。

葵さんもどうすればいいかわからないようで、珍しく困っているよ

うである。

と、とにかくなにか話をしないと。話題、何か話題は……、そうだ。「そ、そういえば、みなもちゃんも空って飛んだことあるの？」

俺的な無難な質問を1つしてみる。しかし、これが最初から破綻していることに気付けなかった。

「えっと、まだ……年齢制限、が」

開幕でいきなりつまづいた。って、そうだよ俺！俺だって今年ようやく年齢制限が解除されたばかりなんだから、学年が下のみなもちゃんが飛んだことあるわけ無いじゃん！

「で、でも……」

俺と葵さんが頭を抱えないように悩みながらなにか話題をひねり出そうとしていると、以外にもみなもちゃんの方から声をかけてくれた。

「興味は、ある。あります」

それつきりまた下を向いてうつむいちゃったけど、うん。そうか、興味はあるのか。

だったら、こんなのはどうか。

「ねえねえ、葵さん」

「ん？ どうした昌也」

「あのね……」

ちよいちよいと葵さんを手招きすると、中腰になってもらって耳元でぐごによごによと内緒話。とっさに浮かんだ考えを葵さんに相談する。

いい考えだと思うんだけど、ルールのにはグレーというかブラックな気もしちゃうし。でも、できれば賛成してくれると嬉しいんだけど。

「まあ、いざとなったら私がいるし、大丈夫だろ」

「じゃあ……」

「ああ、行ってきな」

よっしや、葵さんからOKが出た。

「こんな大きなんだ。私達だけじゃ、もつたいないもん」

「ありがとう！ 葵さん！」

フライングスーツをトートバッグに戻して葵さんに渡すと、俺はみなもちゃんの近くまで駆け寄って手をのばした。

「じゃあさ、行こう」

「行くつて、どこに……？」

「空に！」

言うが早いか、俺はみなもちゃんの手を取る。

「え？ あの、ま、まさや……さん!?!」

「絶対に離さないでね。『FLY』！」

強く手を握ったまま、俺は『起動キー』を口にする。グラシユから発生した反重力子がメンブレンを形成し、二人の体を重力から解き放った。速すぎず、しかし遅すぎず。浮遊感と潮風を全身で感じながら、俺達は徐々に高度を上げてゆく。

初めて空を飛んだ時、どんな気持ちだったっけ。ワクワクしていて、ドキドキしていて、グラシユを履いた瞬間から待ち遠しくて仕方なくて、そして期待を遥かに超えていった。

初めて味わった浮遊感も、そして葵さんに導かれて飛んだ空も、忘れられない大事な思い出だ。ちよつと強引すぎたかもしれないけど、興味があるつて知っちゃったからには、連れてこずにいれなかった。なぜなら、

——空はこんなにも大きいんだから——

俺は視線を空から誰かを導く手に、そしてみなもちゃんへと移す。そして、やっぱりよかったと確信した。なぜならその目は、星を散りばめたみたいにキラキラと輝いていたんだから。

真夏の風が運ぶ潮の香り、その向こうには四島列島を形成する島々の作る美しい景色が広がっている。遮るものはなにもない、蒼と白のキャンバスいっぱい着に描かれたこの景色は、この場所いからしか見ることができない絶景だ。

「……………きれい」

その一言が聞けただけでも連れてきた甲斐があったというもので、空の楽しさは景色だけじゃない。

もつと色んなものを見せてあげたい、風を感じてもらいたい。

そのための翼だつて、今の俺にはあるんだから。

「じゃあ、ちよつと飛ぶよ」

「うん！」

俺の問いかけに、みなもちゃんは元気に答えてくれた。それに合わせて、俺も再び体を傾けて加速する。まるで風そのものになったかのように、コントレイルを引きながら俺達は縦横無尽に空を駆け抜ける。

電話を終えて戻ってきた白瀬さんが葵さんと言い争いを始めるまで、俺はみなもちやと空を飛び続けていた。

Chapter 3

お盆休みに入り、フライングサーカスの練習は一旦休止。俺も父さんと母さんのおじいちゃんとおばあちゃんの家顔を出して、ご飯を食べて、お墓参りをして、教会でお祈りをして、そんな感じでお盆の用事はだいたい終わり。あとは宿題をして、夏休みスペシャルのアニメを見ながら満喫……って、去年までならなってたんだろうな。

自主練……ってほどじゃないけど、飛行規制のされてない浜辺でスツキリするまで飛んでいた。毎日飛んでないと感覚を忘れちゃいそうだし、なんだか落ち着かないんだよな。炎天下ってのもあって、飛んでる時間は30分くらいだけ。

でも、今日は夜にもちよつとしたイベントがある。

「昌也、行くぞー」

「はいー」

財布と、そしてグラシユを突っ込んだかばんを背負って父さんと一緒に家を出た。日は既に沈んでいて、周囲は少ない街灯がうつすらと道路を照らすだけ。正直、やや心もとない。

でも遠くの方——海岸沿いにある公園からは朱色の明かりと賑やかな祭り囃子が聞こえてくる。

「それにしても昌也、かなり焼けたな」

「毎日フライングサーカスの練習で飛んでるから」

今までだって日焼けをしていなかったわけではないのだが、今年は間違いなく過去最高に焼けていると思う。日光を遮るものがないフライングサーカスを真夏の仇州でやってればそりやそうなんだろうけど。

「それに、今年は宿題の心配もしなくて良さそうだしなあ。父さんも安心だ」

「ああっー」

父さんの何気ない一言で、めちゃくちゃ大事なことを思い出してしまった。

「父さんだよ、フライングサーカスの条件に夏休みの宿題するよう

にって言ったの！」

「はっはっはー。毎年最後の一週間になって困ってる昌也のために、心を鬼にして各務さんに頼んだんだぞ？」

「つとにもう。それがなかったらもつとフライングサーカスの練習ができたのに……」

なにが『心を鬼にして』だよ、顔がめっちゃにやけてんじやん。まあ、夏休みの終わり頃まで宿題サボってたのは悪いなあとは思ってたけどさあ。でも、今は一秒でも長く飛んでいたいんだから、俺がどれだけでもどかしかつたことか、父さんに教えてやりたい。具体的には、四〇〇字詰め原稿用紙一枚にびっしり書き込んでも足りないくらい。「まあ、頼んだのは事実なんだけど。父さんが頼まなくても各務さんはもともと勉強をちゃんとするのを条件にしようとしてたみたいだから、結果は変わらなかったと思うぞ」

「……………マジで？」

「ああ、大マジだ。だから昌也、各務さんに教えてもらうなら、夏休みが終わっても小学校の勉強を頑張るんだぞ」

やばいやばい、一瞬目の前が真つ暗になるかと思った。まあ、日は沈んでるから真つ暗なんですけどね、ってそうじゃなくて！

今はまだ夏休み、午前中は勉強としても午後からは好きだけ飛べる。けど休みが終わって授業が始まったら、それこそ練習時間が限られてしまう。でも、今から一人で練習したり、葵さん以外の人に教えてもらうなんて考えられない。

だって俺は他の誰でもない、各務葵その人にフライングサーカスを教えて欲しいのだから。こうなれば、俺も腹をくくろう。

「ああもう！ わかったよ！ 葵さんに教えてもらえるなら、何だっやってやらあ！」

勉強がなんぼのもんじや！ テストで百点とって、堂々と葵さんに教えてもらってやる。俺のやけくそ気味の決意を聞いて、父さんは楽しそうに笑っていた。

友達とよく遊んでいる浜辺の公園も、今日は全く雰囲気違ってい

た。中央には大きな櫓やぐらが組まれ、その上では太鼓と笛が四拍子の軽快なリズムを奏でている。櫓から四方に伸びたロープには赤提灯が吊るされ、周囲では近所のばあちゃん達が元気そうに踊っていた。

とはいえ、俺の興味はもちろん地味な盆踊りなんかではなく……、

「父さん、かき氷！」

みんな大好き、出店の方だ。食べ物、くじ、射的、お面によくわからない光るグッズまで、色々出ている。

「暑いし、買ってくか。昌也、何味にする？」

「ブルーハワイ！」

「よし。すいませーん、ブルーハワイとメロンを1つずつお願いします」

父さんの注文に店員のお兄さんは景気良さげに応えようと、かき氷機でシャカシャカと氷を擦り始める。目の前でどんとどんと山になっていくかき氷は、見ているだけでも楽しくなってくる。そして30秒もしないうちに、青と緑のシロップのかかったかき氷が完成した。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます！」

お兄さんからブルーハワイのかき氷を受け取って、さっそく一口パクリ。んんん!! 頭の奥の方でキーンって鋭い痛みが！ でも夏の暑さなんてふつとぶくらい冷たくて甘くて美味しい。

「っははは、がつつきすぎだぞ？ 昌也」

と、聞き覚えのある声が、って葵さんじゃん!?

「5日ぶりくらいか。元気にしてたか？ 宿題は進んでるか？ んんん？」

腰に手を当てて仁王立ちする葵さんは、グラシユと同じ深紅の浴衣を着ていた。黄色いラインで蝶の模様が描かれていて、とても葵さんに似合っていると思う。

あまりのかっこよさに、思わず見とれてしまった。

「んぐんぐ……。ちゃんとしてるって。じゃないと練習教えてもらえないんだし」

「うむ、それならよろしい」

葵さんは満足そうに頷くと、姿勢を正して父さんに向き直った。

「ご無沙汰してます、日向さん」

「いえいえ、それはこちらの方です。昌也が大変世話になっているのに、なかなかご挨拶できず申し訳ない」

家ではあまり見られない、真面目な方の父さんだ。半分くらいお仕事モードが入ってる感じがする。ちなみに半分くらいになってる理由は、手元のかき氷のせいだったりする。

「とんでもないです。とても素直で、教えたことはどんどん覚えていって。楽しくやらせてもらってますよ」

かき氷を堪能しているふりをしつつ、葵さんの言葉に意識を傾ける。葵さん、俺のことをどう思ってるんだろう、めっちゃ気になる。父さんの前だから多少話を盛ってくれるかもお……いや、葵さんに限ってそれはないか。

「でも、各務さんって全国区の選手なんですよ？ まさかフライングサーカスマで教わることになるとは思っていなかったもので。あの、練習のお邪魔になつたりなんかは……」

「好きでやってることなので、気になさらないでください。私の方も、初心を思い出すいい機会になっています」

「そう言っていたら、ありがたい限りです」
ええっと、これは……褒められたってことでもいいのかな？ まあ、あの飛翔姫の葵さんに指導してもらってるんだから、伸びないほうがおかしいってもんなんだけどね。

うん、でもなんか、いざ葵さんから褒められると、なんか照れくさいな。

「これからもご迷惑をおかけすると思いますが、昌也のこと、よろしくお願いします」

「はい、ビシビシ指導させて頂きます。あと、日向さんとの約束の勉強の方も」

最後になんかよろしくない密約が交わされた気もするけど、聞かなかったことにしておいてあげよう。なんせ、今日の俺は機嫌がいいもんね！

「ねえ、父さん。葵さんとお店まわってきていい？」

「私は構いませんよ。あ、すいません。宇治金時を1つ」

どうしたものかと悩んでる父さんに先んじて、葵さんがにつこり笑ってOKを出した。それならばと、

「じゃあ、昌也のこと、お願いします。私はそのベンチで休んでいまずんで」

葵さんに頭を下げ、休憩所兼喫煙所となっているベンチの方へ。先客らしきお父さん達もいっぱいで座るスペースはなさそうだけど。

「あ、昌也、これお小遣いな」

「ありがと、父さん。じゃあ、行ってくるね！」

そんなわけで父さんを見送りつつ、俺と葵さんはかき氷を片手に出店巡りを始めた。

かき氷を食べながら出店を眺めていると、最近よく会う二人の姿をみつけた。

「よう、隼人。そっちも来てたんだな」

「葵こそ。親戚の人達ほつたらかして大丈夫なのか？」

白瀬隼人さん。左手首に水風船をぶら下げながら焼きそばをほおばっていた。その大柄な白瀬さんの背後からは、みなもちゃんの姿がちよつとだけ見えている。恥ずかしがっているのか、目があつたとたんに隠れられてしまったけど。

「そっちは今、坊さんか神父のところに行ってる。さっきやつと開放されたところさ」

「はははは、お疲れ様。まあ、有名校だと思って諦めるんだな」

葵さんと白瀬さんが世間話をしているみたいだし、こっちはみなもちゃん……というわけで、ぐるつと白瀬さんの背後に回り込んで、

「こんばんは、みなもちゃん」

「……………こんばんは、です。まさやさん」

まずは挨拶から……と思ったんだけど。や、やばい。いつもとは違う、浴衣姿のみなもちゃんが、ぱり可愛い。スカイブルーを基調とし、

赤青黄白の水風船があしらわれていて、うん、とても似合っている。

「あ、まさやさんも、かき氷」

「うん、暑かったから」

わつと、浴衣ばかりに目がいつてたけど、みなもちゃんの手にもかき氷がある。イチゴ味の練乳トッピングだ。ああ、イチゴ味も美味しそうだな。

「あの、ちよつと……食べ、ますか？」

「え？ いいの？」

俺の視線に気付いたのか、ストローをくわえたまま、どうぞ、と容器を差し出してくれるみなもちゃん。ほ、ほんとにもらっちゃって、いいのかな？ ちよつと気がひけるけど、せっかくみなもちゃんが勇気を出してくれたんだし、一口だけでもらっちゃおうか。定番のイチゴ味もやっぱり食べたいし。

それじゃあ、と俺がストローを伸ばそうとしたその時、

「悪いね、みなもちゃん。それじゃあ、一口いただいでいくよ」

と、いきなり脇から葵さんがでてきて、みなもちゃんのかき氷をひとすくいしていった。

「ん、やっぱりかき氷といえばイチゴ味は外せないな」

「ちよ、葵さん！」

「どうしたんだ昌也？ あ、私の宇治金時が食べたいのか？ しょうがないヤツだなあ」

「違うって！ そうじゃなくって……」

せっかく恥ずかしがり屋のみなもちゃんが頑張ってくれたのに、と抗議しようとした俺の目の前に、ひよいと抹茶のシロップとあんこが乗ったストローが差し出される。

「ほい、あーん」

ん？ え？ これはいつたい、どういう状況なんだ……。

宇治金時のかき氷を一口分のせたストロー、それを葵さんが、俺に？

「もしかして、昌也は抹茶はダメだったか？ まあ、まだ小学生の昌也には早かったかもしれないな。この大人の味は」

「ん、んなことねえって！ あむっ！」

葵さんの計略に乗せられて、口が勝手に食べてしまっていた。

「って待って待って！ これって、葵さんのストローだよな？ それじゃあこれは、かかかか……間接なんちやらってやつになってしまわないいだろか。」

「どうだ？ お子様な口の昌也には、やっぱりまだ早かったか？」

「こ、これくらいなんともねえよ！ 抹茶味くらい食べられるっての！」

正直なところ、頭の中がこんがらがって味なんてわかったものじゃないんだけど。

「こんなんで甘いも苦いもわかるか！」

「つとに、葵さんのバカ……」

「ん？ なにか言ったか？ 昌也」

「何も言っていない。行こ、みなもちゃん」

空いている方の手で、みなもちゃんの浴衣の袖を引いて歩き出す。

「あつ。う、うん。行ってくるね、お兄ちゃん」

「お、おう。足元に気をつけるんだぞ」

誰にも聞こえないように葵さんへ文句をぶつけ、俺はそそくさとその場から離れた。今はちよつと、葵さんと顔を合わせたくない。さっきのことを思い出して、無性に恥ずかしくなってしまうそうだから。

「葵、やりすぎ」

「いやあ、なんか可愛くてつい。な？」

『「な？」じゃねえよ。まあ、気持ちにはわからなくもないが。いたいけな少年の心を弄ぶのも、たいがいにしとけよ」

「わかっているって。次からは気をつけるさ」

よし、気分を切り替えていこう。せつかくの盆踊りだし、楽しまないと。

幸い、父さんから軍資金はもらっている。お小遣いも多少はある。さつき勇気を出してくれたみなもちゃんのためにも、楽しんでもらえるよう頑張らないと。俺はそうやって、心の中で固く決意するのであった。